

沖縄本島北部及び 周辺離島の文化財

本島北部及び周辺離島





宇佐浜遺跡 P.14

今帰仁城跡 P.16-P.17
(今帰仁城跡 附シイナ城跡)

今帰仁村仲原馬場 P.18

屋我地運天原サバヤ貝塚 P.19

今帰仁城跡 附シイナ城跡 P.16
(シイナ城跡)

古我知焼窯跡 P.21

改決羽地川碑記 P.20

龍の滝 P.22

国頭村

大宜味村

東村

名護市

宜野座村

凡例

世界遺産

国指定史跡 国指定名勝

県指定史跡 県指定名勝

登録記念物

道路凡例

国道 県道主要地方道 県道一般道 高速道路 市町村境界線

う ざ は ま い せ き
宇佐浜遺跡

国指定史跡

●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日



宇佐浜遺跡は沖縄本島最北端の辺戸岬の東側に連なる標高約 50 m の台地周辺に立地しています。縄文時代晩期の遺跡で、1954 (昭和 29) 年 6 月 17 日に山入端清次・多和田真淳によって発見されています。

1968 (昭和 43) 年から 1971 (昭和 46) 年に*琉球政府文化財保護委員会が実施した、4回にわたる発掘調査の結果、拳大の石材を貼り巡らせた*石組遺構が数基発見されています。遺構内に*炉跡とみられる焼けて赤くなった

土の部分も発見されていることから*石組住居跡と考えられます。

出土遺物は磨製の*石斧や石皿、*磨石などの石器があり、土器は無文の壺形と深鉢形があります。これらの土器から以下の特徴をもつ土器を「宇佐浜式土器」と言います。このような土器や石組住居跡と似たような特色をもつ遺跡が奄美大島にもあります。



宇佐浜式土器の特徴

- ・壺形または深鉢形土器で、口縁部 (P15) が厚い
- ・口縁部の断面が、三角形またはかまぼこ状
- ・底部が尖っている

DATA

所在地：国頭村宇辺戸宇佐浜

先史時代を理解するために

●暮らしの移り変わり

③縄文時代後期

台地に住む集団が現れ始め、
貝塚を形成する。



④縄文時代晩期

集落を形成する人々が現れ始める。



※イラストはイメージです。

グスク (城)

透水層・貯水層

湧水

岩陰・洞穴

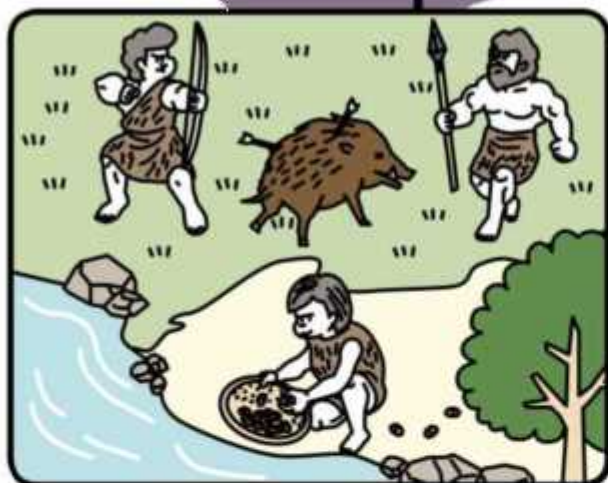
不透水層

陥没ドリーネ

湧水

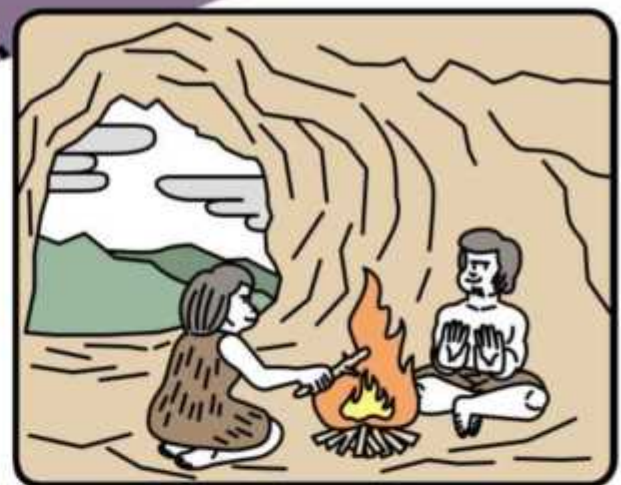
凡例

	赤土層
	石灰岩
	粘土層



②縄文時代前・中期

暖かくなって平地で生活を始める集団も
現れる。

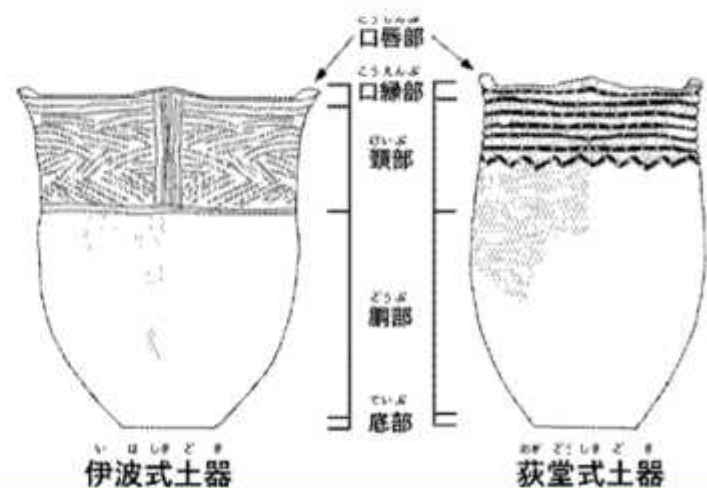


①縄文時代早期

岩かげや洞穴に住んで寒さをしのぐ。

●土器の部分名について

いほしきどき おぎどうしきどき
伊波式土器と荻堂式土器を使って、
各部分の名前を見てみよう。



な き じん じょう あと つけたり じょう あと

今帰仁城跡 附シイナ城跡

●世界遺産登録年月日/2000(平成12)年12月2日 ●指定年月日/1972(昭和47)年5月15日



今帰仁城跡 附シイナ城跡は、今帰仁村今泊の通称「ハンタ原」と呼ばれる標高約100mの石灰岩の丘の上に築かれています。曲線の造形が見事な城壁は、総延長約1,500mにおよび、硬い灰色の石灰岩を手ごろな大きさに割って、3～8mの高さに積み上げたものです。*主郭を中心として10個の*郭からできている*連郭式の山城で、三方を山や川、急な崖に囲まれ外から攻撃されにくい造りとなっています。

城の創建は定かではありませんが、中国の歴史書「明実録」や琉球の歴史書*「中山世鑑」、*「中山世譜」によると、1383(洪武16)年に怕尼芝という人物が城主となり、次に珉、最後に攀安知が城主になったとされています。攀安知は1416(永楽14)年(1422年とする説もある)、中山の尚巴志によって滅ぼされ、以後今帰仁城には*北山監守が置かれましたが、1665(康熙4)年

に最後の監守が首里に引き上げて廃城になったといわれています。

2000(平成12)年12月には首里城跡や座喜味城跡などとともに、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。



シイナ城跡(写真:今帰仁村教育委員会提供)

県指定名勝

な き じん じょう せき
今帰仁城跡

●指定年月日 / 1955(昭和30)年1月25日



指定経緯について

今帰仁城跡は、1955(昭和30)年1月25日に琉球政府指定の史跡と名勝に指定され、1958(昭和33)年には特別史跡に指定されました。沖縄が日本に復帰した1972(昭和47)年5月15日には、国指定史跡、県指定名勝に指定されました。その後2010(平成22)年にはシイナ城跡が指定範囲に追加され、指定の名称が変更され現在に至ります。

しかし、2000(平成12)年の世界遺産登録時には、シイナ城跡はまだ指定の範囲に含まれていないため、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」としての登録は「今帰仁城跡」のみとなっています。

ふりがなについて

国指定史跡、県指定名勝の読み方では「なきじんじょうせき」となりますが、世界遺産に登録された際は、「なきじんじょうあと」という読み方で登録されました。その後、シイナ城跡を追加する際、「なきじんじょうあと つけたりしいなじょうあと」となりました。



DATA

所在地：今帰仁村字今泊ハンタ原

開園時間：1～4月、9～12月：8時～18時(最終入場17時30分)
5月～8月：8時～19時(最終入場18時30分)

定休日：年中無休(臨時休園あり)

利用料金：大人 400円 小・中高生 300円 小学生未満 無料
※10名以上で団体割引適用

(2018年3月現在)

県指定史跡

今帰仁村仲原馬場

●指定年月日／1959(昭和34)年6月1日



今帰仁村仲原馬場は、県内に残る最も保存状態の良い馬場です。

馬場は今帰仁小学校の南側にあり、幅約30m、長さ約250mです。その周りには高さ約1m、幅5～10mに土を盛り上げて造られた観覧席があり、琉球松の並木が馬場を覆い、日射しを遮るようになっています。

昔は首里城下の識名や平良をはじめ各地に馬場があり、古くから民俗行事や村の産業・教育の振興を図る集会、

大衆の娯楽の場として利用された場所です。戦前は各村に2、3カ所馬場がありましたが、戦争による破壊や耕地、宅地になり姿を消してしまいました。そのような中で、仲原馬場は唯一沖縄の馬場の形式を残した貴重な遺跡です。



DATA

所在地：今帰仁村字越地

県指定史跡

屋我地運天原サバヤ貝塚

●指定年月日 / 1956(昭和31)年10月19日



屋我地運天原サバヤ貝塚は、弥生時代中期の複合遺跡^{いせき}で、1954(昭和29)年1月31日に多和田真淳^{たわだ しんじゅん}によって発見されました。

遺跡は、運天原公民館の東隣にあるサバヤと呼ばれる小さな丘の南側斜面に形成されています。遺跡の上方には、間口約10m、高さ約2m、奥行約3mの洞穴^{どうけつ}があり、先史時代の住居跡と考えられています。

本格的な発掘調査はされていませんが、洞穴前庭部に

約1mの貝層があり、壺型土器^{つぼがたどき}を特徴とする*面縄第1式^{おもなわ}土器の出土により、奄美大島との関係を示す重要な遺跡と考えられています。また、弥生中期頃の甕形土器^{かめがたどき}の底部が1点、地表面から採集されています。

1956(昭和31)年10月19日に*琉球政府文化財保護委員会は、「琉球縄文後期下半^{かはん}の面縄第1式土器が出土、貝塚上方のサバヤ洞穴は住居跡である」という理由で、琉球政府指定埋蔵文化財に指定しており、1972(昭和47)年に沖縄の本土復帰に伴い、県指定の史跡になりました。



DATA

所在地：名護市宇屋我地運天原



運天原公民館裏手より

改決羽地川碑記

●指定年月日／1969(昭和44)年8月26日



改決羽地川碑記は、1735(雍正13)年に行われた羽地川の改修工事を記念して建立された石碑です。久志と羽地両地区の境界にある山々が羽地川の水源で、そこから、親川、田井等、川上などの村々を流れて呉我港に注ぎますが、古くはその河口は更に西の運天寄りにあったといわれています。1735年7月の大雨の時には、激しい川の流れがことごとく田を壊しました。改修工事は、当時の三司官(大臣)である具志頭親方蔡温が王命を受けて工

事に着手しており、周辺の村々から延べ10万人を動員して3カ月間で完了させました。この改修で羽地川は田井等や振慶名の南を流れて呉我の海に注ぐようになりました。

最初の石碑は、壊れてしまったことから、1830(道光10)年に改めて建立した石碑が現存していますが、現在は全面が磨り減って原形を留めておらず、文字はほとんど読めません。



DATA

所在地：名護市宇田井等前方川上境内上増原

注意事項：現地にあるのはレプリカです。実物は名護市立博物館にあります。



古我知焼窯跡

●指定年月日 / 1972(昭和47)年5月12日



古我知焼窯跡は、近世の遺跡で本部半島の付根に位置し、古我知集落西方の標高20～30mの丘陵上にあります。

古我知焼の窯の創設年代は不明ですが、この地からは*厨子甕や水甕、壺、播鉢、茶碗などの日用雑器類の破片が採集されています。およそ160年前に使用されなくなったといわれています。

知花焼や喜名焼は荒焼(素焼)が主体であるのに対し、



DATA

所在地：名護市宇古我知奥又原

古我知焼は上焼(*釉薬がけ)が主体で、南方系や朝鮮系、薩摩系の焼物に通ずる技法がみられるといわれています。釉薬は*灰釉や*鉄釉が多く使われ、布拭きや藁拭きという特有の*施釉方法を用いています。また、文様付けは*釘彫りや*貼付文、*飛鉦、*印花文などの技法が取り入れられています。古我知焼窯跡は沖縄における陶器を焼く技術を知る上で極めて重要な窯跡です。

なお、近年まで地表に数基の窯が露出し残っていましたが、現在、上部の構造物(窯)は、開発によって失われました。

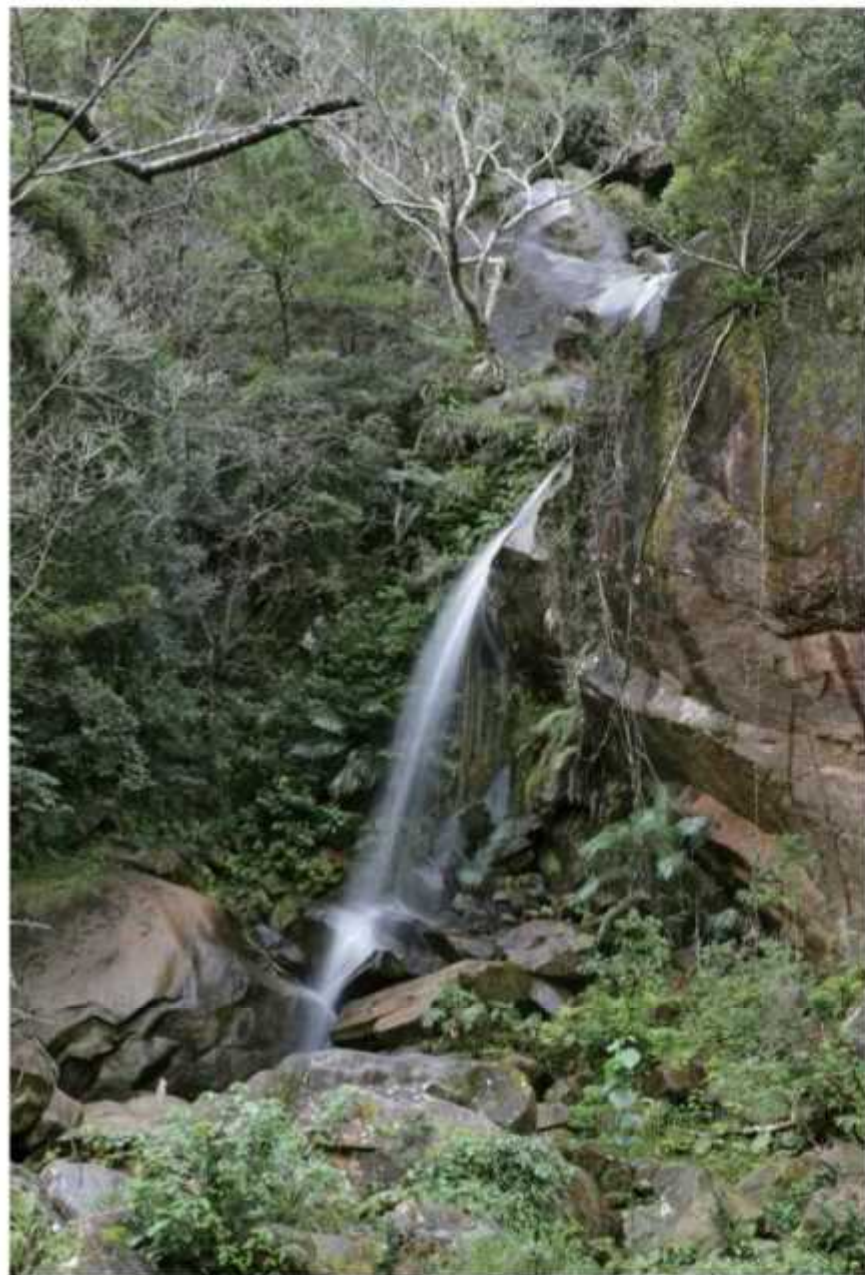


赤土が露出した丘

とどろき たき
轟の滝

県指定名勝

●指定年月日／1956(昭和31)年2月22日



轟の滝は、別名数久田轟とも呼ばれる、名護市数久田にある景勝地の一つです。

滝は数久田川の河口から約1km上流にあり、滝の上方は久志岳と辺野古岳より流れている川で、その長さは約4kmといわれています。滝の高さは約30mで、沖縄本島では2番目の大きさを誇ります。滝壺は、名勝に指定された当時には一定の規模があったようですが、現在は自然の落石などで形状が変化しています。左右にある巨岩（火成岩：班状花崗岩）の間から流れ落ちる水の音がゴウゴウと轟音をたてて聞こえることから、その名がついたといわれています。滝の周辺に行くと水飛沫があたり、夏は涼味満点、古から名勝地として知られた場所で、現在でも北部の観光地の一つとなっています。

その様子は和歌や琉歌にも多く詠まれたり謡われています。代表的な琉歌には「夏やおしつれて 浮世名に立ちゆる 数久田轟に 滝に遊ば（夏は皆一緒に、世間で評判の高い数久田轟の滝へ行って遊ぼう）」（読人しらず）や「夏もよそなしゆさ 浮世名に立ちゆる 数久田とどろきの 瀧の麓（世間に評判の高い数久田の轟の滝のもとには、夏も忘れるくらいだ）」（松田賀烈）などがあります。

また、1719（康熙58）年には尚敬王の冊封副使として琉球に来た徐葆光が書いた『中山伝信録』の中にも〈轟泉〉として紹介されています。



数久田の轟の滝（琉球大学附属図書館提供）



DATA

所在地：名護市字数久田

山川港原遺跡

●指定年月日 / 1974(昭和49)年12月26日



山川港原遺跡は縄文時代晩期の遺跡で、山川垣内権現やまがわがきうちごんげん洞穴遺跡 (P24) の西方、海岸に面した高さ 15 ~ 20 m の琉球石灰岩台地上の傾斜面に形成された遺跡です。

遺跡の範囲は台地上で少し凹地くぼちになっているところから、その東方にある山川垣内権現洞穴遺跡の上方付近まで広がっています。

出土する主な遺物は口縁部こうえんぶ (P15) が厚く文様の無い土器

で、他に小型の平たい石斧せきぶも出土していますが、貝殻、ひらぎょこつ 獣魚骨などの自然遺物の出土はありません。遺跡の立地条件や出土遺物などによって、これまでの類似の研究例から推測して住居の跡が存在する可能性があります。

この遺跡は隣接する縄文後期・晩期の浜元サチピン貝塚 (P25) に関連する重要な遺跡です。



DATA

所在地：本部町字山川港原

県指定史跡

山川垣内権現洞穴遺跡

●指定年月日／1974(昭和49)年12月26日



山川垣内権現洞穴遺跡は、弥生時代後期、*グスク時代の複合遺跡です。山川海岸に面した琉球石灰岩の巨岩にある、入口の幅が約2m、奥行きが約4mの洞穴です。地元では「カチヌチダンジン」と呼ばれ、今でも地域の人々の信仰の対象になっています。

洞穴内には人骨が葬られており、かつてここからカムイ

ヤキの壺の完形品が見つかっています。また、洞穴には遺物を含んだ黒褐色の層が堆積しており、その中から弥生時代後期、グスク時代のものと推定される土器や貝製のおもりなどが見つかっています。県内にこのような内容をもつ洞穴遺跡は極めて少なく、学術上価値があることから指定されました。



DATA

所在地：本部町字山川港原



県指定史跡

はま もと かい づか

浜元サチピン貝塚

●指定年月日 / 1974(昭和49)年12月26日



萩堂式土器をモチーフにした
説明板

伊波式土器をモチーフにした
指差の範囲図

浜元サチピン貝塚は、縄文時代後期と晩期の複合遺跡^{いせき}です。遺跡はリゾート施設内にあり、標高約 20 m の西海岸に面した琉球石灰岩の台地上の畑地（俗称サチピン）及びその崖下^{がけした}に立地しています。

台地上から、無文の土器と石器類が多量に出土し、海岸側の崖下斜面の貝層から、主として、伊波式土器^{いはしきどき} (P42) や萩堂式土器^{おぎどうしきどき} (P58) などが出土しています。しかし、本格

的な発掘調査が実施されていないので、遺跡の具体的な特徴など詳しいことは分かっていません。台地上の遺跡は縄文晩期、崖下部分の遺跡は縄文後期と縄文時代における遺跡立地をよく示し、遺跡の成り立ちを知る上で貴重な遺跡です。また、縄文後期の遺跡として、本島北部における数少ない例の一つで、規模も大きく、後期と晩期の両期にまたがる貴重な遺跡と言えます。

なお、1974(昭和49)年12月、沖縄国際海洋博覧会の会場設営工事に際し、計画区域から除外され、1974年に、県指定史跡となっています。



DATA

所在地：本部町字浜元北原

注意事項：見学することはできますが、周辺にはリゾート施設などがあります。見学の際は周囲に配慮しましょう。



仲泊遺跡は、縄文時代後・晩期、弥生時代、近世の複合遺跡です。遺跡は標高 20 ～ 30 m の琉球石灰岩丘陵地西側の崖下に形成されています。史跡は先史時代の第1～4貝塚と近世の石畳道で構成されています。第1貝塚は1954(昭和29)年、第2貝塚は1959(昭和34)年に多和田真淳によって発見されています。第3貝塚は1973(昭和48)年に沖縄開発庁(現内閣府)の国道58号の道路拡張工事に伴って、当時の沖縄県文化課職

員によって発見されています。第4貝塚と呼ばれている縄文時代後期の岩陰礫床住居跡から、仲泊式土器が発見されています。

近世の石畳道は首里城を起点とし、国頭へ向かう西海道(P27)の一部で、幅は1.5～3mあり、現存する石畳道の総延長は約174mです。別名比屋根坂とも呼ばれています。

1973年に国道58号の道路拡張工事で破壊されそうになりましたが、保存運動により遺跡が残され、史跡指定となりました。



DATA

所在地：恩納村字仲泊比屋根原



石畳道の一部



仲泊

国頭方西海道

●指定年月日 / 2004(平成16)年9月30日



国頭方西海道は、琉球国の首都であった首里と地方を結ぶ道の一つであり、15世紀後半以降の第二尚氏時代には海上を含むすべての道が首里に通ずる道として整備されたといわれています。このうち西海道は、首里から浦添*間切、北谷、読谷山、金武、名護、今帰仁、国頭の各間切を通る道筋です。

恩納村を通る西海道は、読谷から多幸山、山田城跡や恩納城跡の下を通過し、琉球国時代の各間切の*番所と

番所を繋ぐ*宿道となっていて、人々や文物の交流を担った主要道路でした。その中で読谷の喜名から恩納を経て、国頭地方に向かう道を「国頭方西海道」と称し、道幅は約2.4mでその両側に松並木が植栽されていたといわれています。西海道は山田城跡の麓を通過していますが、途中に山田谷川のアーチ状の石橋(*石碕)があります。石碕は、琉球石灰岩の野面積み(P56)の桁部分に、アーチ形式を施したものです。その東には貝塚と*岩陰礫床住居跡の遺跡である史跡仲泊遺跡(P26)があり、道は石畳でこの遺跡を通過しており、比屋根坂と呼ばれています。



DATA

所在地：恩納村字仲泊、字山田、字真栄田



西海道の一部



谷川の石碕

山田城跡

●指定年月日／2008(平成20)年4月1日



城壁の基礎となる石の礎石状況



発掘調査の様子



柱穴群の発掘調査の様子

(発掘当時の写真：恩納村教育委員会提供)

山田城跡は恩納村にある、標高約90mの琉球石灰岩の台地上に立地する*グスク時代の遺跡です。

1986(昭和61)年から1988(昭和63)年まで、恩納村教育委員会が発掘調査を実施した結果、グスクは東西30m、南北160mの丘陵頂部に7カ所の平場を造り、平場間の境界に切石の石列を設けていました。また、グスク周辺部に野面積み(P56)の石垣を配し、平場には無数の柱の穴があり、建物は少なくとも4回建替えがあった

ことが分かっています。遺跡からはグスク系土器や*褐釉陶器、中国産*陶磁器、鉄製品、*装身具、石製品、叩き目がある瓦、自然遺物などが出土しています。

*三山時代には中山勢力圏の北端に位置し、北山勢力圏との境界にあたります。読谷山地域を治めていた*按司の居城であったといわれており、三山統一に重要な役割を担った護佐丸の最初の居城でもあります。護佐丸は後に座喜味城(P50)を築城し拠点を移しますが、伝承によるとその際、山田城の石垣を壊して運んで利用したといわれています。

また、城跡の西側の崖に護佐丸先祖の墓があり、1740(乾隆5)年に建立された墓碑があります。



DATA

所在地：恩納村字山田

注意事項：進入口が未整備のため見学できません。

(2018年3月現在)

県指定名勝

まんざもう
万座毛

●指定年月日 / 1972(昭和47)年5月12日



万座毛は波でけずられてできた琉球石灰岩の海食崖地形上に自然の芝生の広場が広がっています。見晴らしが良く、訪れる人も多く、沖縄本島における代表的な観光地でもあります。1726(雍正4)年、尚敬王がこの地を訪れた際、「万人をも座せしむるにたる勝地なり(多くの人が座ることができる程広く、美しい場所である。)」と評したことから、この地名を得たと伝えられています。

また、尚敬王を迎えた際に、悪天候であったため、女

流歌人恩納ナベが風雨を止めたい思いから即興で詠んだといわれている、「波の声もとまれ 風の声もとまれ 首里天がなし 美御機拜ま(波の音も静まれ。風の音も静かになれ。首里の王様の御顔を拝しましょう。)」という歌碑が入り口付近に建っています。



DATA

所在地：恩納村字恩納

久里原貝塚

●指定年月日／1982(昭和57)年3月4日



久里原貝塚は、縄文時代前～晩期、弥生時代中期の複合遺跡で、伊平屋村前泊集落北の標高約5mの砂丘地に立地しています。遺物の分布は広範囲にわたり、東側が縄文時代前期で、西側が縄文時代後期の遺跡です。

1961(昭和36)年と1979(昭和54)年から1980(昭和55)年に発掘調査が行われています。1979年の調査で、8枚の*遺物包含層が確認され、伊波式土器(p42)や荻堂式土器(p58)、*大山式土器、*カヤウチパンタ式土器

などを中心に奄美系土器も数種類出土しています。また、遺物を含んだ最も下の層から、縄文時代前期の*条痕文土器が見つかり、伊平屋島の先史時代の始まった時期は、さらに古いと考えられています。

奄美系土器が見つかったことや、条痕文土器などの伝わった経路など、沖縄と九州・奄美との文化的な関わりを調べていく上でとても重要な貝塚です。



DATA

所在地：伊平屋村字前泊久里原



貝塚の全体

県指定史跡

い ぜ な じょう せき
伊是名城跡

●指定年月日 / 1958(昭和33)年1月17日



伊是名城跡は、伊是名島にある*グスク時代の遺跡です。伊是名島の東方に位置し、海岸に突き出た標高約98 mの三角錐状のチャートからなる岩山の中腹に位置しています。

築城年代は明らかではありませんが、伝承によると、伊平屋島の領主であった屋蔵大主が子どもの佐銘川(鮫川)大主に伊是名グスクを築かせて、この地を治めさせたと伝えられています。



DATA

所在地：伊是名村字伊是名

グスクの北面以外は急斜面で天然の要塞地になっており、グスク内はテラス状の平坦な面を有しています。北面中腹にはチャートと石灰岩を組み合わせた野面積み(P56)の石垣が残っています。

古文書によると、今帰仁グスクの軍勢が伊是名グスクを攻めた時の記録があり、水攻めにしようとしたが、城内の中腹で兵が馬10頭に水浴びをさせたので、今帰仁の軍勢は水が豊富にあり、水攻めでは落ちないと考え、引き揚げたといわれています。城内には干ばつでも涸れないという人為的に掘られた井戸と三つの御嶽があります。



海上から見た伊是名城跡

伊是名玉御殿

●指定年月日／1958(昭和33)年1月17日



伊是名玉御殿は伊是名城跡の北面中腹に位置し、北向きに築造された第二尚氏王統にかかわる陵墓です。

伝承によると、1501(弘治14)年、尚真王の頃に首里の玉陵(P70・71)を造営した直後に造られたといわれています。墓域の総面積は約200m²で、間口7.5m、奥行4.9m、正面の軒高2.5m、棟の高さ3.5mの破風型です。琉球石灰岩で墓室を造り、屋根は梁石を棟木として架け、その上に石版を両流れに葺いて切妻屋根とし、

外面は全面漆喰塗りで仕上げています。門前には12段の階段があり、入口の門は石造の*アーチ門で、両開きの木製格子扉があり、内部には急勾配で踏み面が広い琉球式の2段の階段があつて墓室に至ります。首里の玉陵に比べると全体的に質素な造りとなっています。

墓室は2室に分かれ、向かって左側には尚円王の父尚稷、その夫人、姉及び祖宗を、右側には代々の伊平屋のアムガナシ(神女)が葬られています。墓室の*石厨子は閃緑岩で造られた家型で、向かって左に2基、右に1基あります。



DATA

所在地：伊是名村字伊是名



入口の門(8034)

県指定史跡

しょう えん おう せい たん ち や しぎ ない じよ

尚円王生誕地屋敷内「みほそ所」

●指定年月日 / 1958(昭和33)年1月17日



尚円王生誕地屋敷内「みほそ所」は、伊是名島にある、第二尚氏初代尚円王の生誕にまつわる屋敷地で、諸見集落内の屋号アサギの一角にあります。そこは、尚円王が生まれ、お臍つぎ（臍の緒を切ること）を行った場所と伝えられており、1726（雍正4）年に琉球国時代の伊平屋島、伊是名島について記された古文書『伊平屋嶋旧記集』にも「みふす所（みほそ所）」の文字が見られます。また、同書には、代々みほそ所の管理者が敷地内に屋敷

を建ててその一角を祀っていたことや、首里王府やその土地に住む人々から拝所として大切にされていたと記されています。

現在、石組みを方形状に巡らした*基壇の内側には、庭石ほどのチャートが据えられており、その周辺はフクギなどの樹木が茂り常に静寂さをただよわせています。

その他にも、「みほそ所」の近くには、産潮平御井と呼ばれる、尚円王が産まれた時に産湯用の水を汲んだといわれる産井があるなど、この土地が尚円王生誕に深く関わる地であることが分かります。



DATA

所在地：伊是名村字諸見



基壇と天ヤ一斗



外観



具志原貝塚は縄文時代前・後・晩期、弥生時代中・後期の複合遺跡で、1957(昭和32)年に多和田真淳により発見されました。

遺跡は伊江島の東海岸、伊江港の北側に形成された標高約10mの砂丘地に立地しています。

これまでに3回の発掘調査が行われ、縄文時代前期から弥生時代後期にかけて約5000年もの長い間生活が営まれていたことが分かります。発掘調査で数多くの土器や

石器、*貝製品、貝類なども発見されており、縄文時代後期から晩期の文化層を良好に残した県内でも稀な遺跡です。中でも九州からもたらされたと思われる弥生式土器(中期の*山ノ口式土器)が沖縄で最初に発見されており、同貝塚が弥生文化と関連があることが実証されたことは考古学史的に名高いことです。その後の調査でも弥生時代後期の*免田式土器やガラス製の小玉も発見されており、当時の人々が盛んに九州と交流していたことを示すことから学術上高い価値を有しています。



DATA

所在地：伊江村宇川平下原



地表に見られる砂穴コ貝の殻



復元された弥生時代の土器

伊江島鹿の化石

●指定年月日 / 1956(昭和31)年10月19日



伊江島を覆う石灰岩は雨水などによって浸食を受けやすくフィッシャー（岩の割れ目）や半洞窟が発達します。石灰岩のフィッシャーでは流れ込む土砂によって巻き込まれた骨や、落ちてしまった動物の遺骸が保存され化石として見られることがあります。伊江島では島に広く分布する琉球石灰岩がこうした条件を満たしていることから、これまでに数種類の鹿化石が発掘されています。そのうち、伊江島の北海岸（カダ原）の石灰岩にできた半洞穴内に

埋蔵されている鹿の化石には、人為的に加工されたものがあることが、戦前、徳永重康博士によって発表されました。そのため、本洞穴は旧石器時代の遺跡として、日本で旧石器文化が確認される戦前から旧石器の遺跡があることが学界の注目を集めました。しかし近年、鹿化石骨について再検証が行われ、噛み痕（自然物）であることが有力となっています。

カダ原ではその他にも、1962（昭和37）年に多和田真淳によって後期更新世後期の人間の頭骨片と数個の打製石器も発見されています。その意味でも考古学史的意義をもつ貴重な遺跡です。



DATA

所在地：伊江村



浜崎貝塚

●指定年月日／1973(昭和48)年2月22日



浜崎貝塚は縄文時代前～晩期、弥生時代の複合遺跡^{いせき}で、1957(昭和32)年に多和田真淳^{たわだしんじゅん}により発見されています。遺跡は伊江島の南海岸の東端に位置する浜崎原の標高約5mの砂丘地に立地しています。

伊江村教育委員会によって、1975(昭和50)年と1979(昭和54)年に発掘調査が行われています。現在の伊江村青少年旅行村の野球場のグラウンドのほぼ東半分及び馬場一帯とその南側の畑地に黒色土^{いぶつほう}の*遺物包

含層^{がんそう}が広がっています。このうち北側地域が縄文後期、南側が縄文中期の*面縄前庭式土器^{おもむなぜんてい}と縄文後期の*喜念^{きねん}Ⅰ式土器及び、縄文時代後期の伊波式土器^{いばしきどき}(P42)や荻堂^{おぎどう}式土器^{しきどき}(P58)、*貝製品や石皿などの石器が多く出土しています。

同貝塚から出土した土器には奄美との関わりを示す土器が多く、奄美地方との交流があったと考えられています。遺跡は広範囲に広がっていますが、縄文後期系の土器が出土している区域のみが、県史跡の指定範囲になっています。



DATA

所在地：伊江村宇浜崎原



遺跡北側より

い え ぞん くすく やま

伊江村の城山

県指定名勝

●指定年月日／1967(昭和42)年4月11日



伊江村の城山は、伊江島の東寄りにそびえ立っている岩山で、伊江島タッチューと呼ばれています。高さは海拔約172mあり、赤色チャートの岩塊からなり、周辺はすべて琉球石灰岩で囲まれています。頂上に登ると360度、さえぎるものがなく国頭や本部半島の山々、恩納岳、周辺の島々が一望でき、県内でも指折りの景勝地となっています。

城山には*ブスク時代の遺跡があり、「城山御嶽」は島



DATA

所在地：伊江村宇東江上ブスク原

の聖地として崇められており、年中行事はこの場所を中心に行われています。また城山周辺は神聖な森であることから、古くから住民の信仰の対象にもなっています。

この城山を遠くから望む姿は、ちょうどクバ笠を伏せた形に見え、古代から航海の目印ともされており、一種の趣があります。

